

焦氏叢書

清、焦 循撰

唐、五峽、三十册

顏李叢書

唐、四峽、卅二册

汪雙池先生叢書

唐、拾七峽、百卅四册

○以上の外、洋裝書其他八十九種、百拾壹册あるも著録せず。尙此等の書籍は昭和六年十二月遺族より全部

大谷大學圖書館に寄贈せられたり。(上村幸次誌)

新刊紹介

新譯佛教聖典詳解

美濃 晃 順 著

本書は名古屋の佛教協會發行の「新譯佛教聖典」改訂版に對する註解書である。もと同協會の「聖典新聞」に連載されてゐたものを、訂正して纏めたものであるから、その目的とする所は勿論佛教の宣布にあり、従つて學究的な著述ではないが、その通俗を主とせる行文の間にも著者の佛教學に於ける深い蘊蓄が彷彿として伺はれることは誠に喜ばしく感ぜられる。

凡例に明言されてある如く、本書執筆の趣意は「出來うる限り既成宗派の教説に關係なく、直接佛陀の眞精神に直參せられ得るよう計らう爲に、すべて近代佛教學の態度と方針とを説明するに努め」てゐられる。従つて各宗派の宗乘的解釋とは幾分異なる點も存することは當然であるが、之に就ては次の如く考へてゐられる。即ち「これは單に各宗共通的立場よりの基礎學的解説を示した迄で、宗學そのものが斯く解説さるべきものとして主張する譯ではない。」と。之は正しい態度であるといへる。宗乘における解釋は宗祖の體驗を通してのものであつて、必ずしも之が原意でなくとも宗乘の立場からは之が最上窮極であらねばならぬ。一般佛教學から見ればしかし、原意を採る方

が、より妥當であり、より、學的であると考へられる。今本書は此の後者の立場に立てるものであり、今後の佛教の生きる道も矢張りどうしても此の後者の立場に立つか、又は此の立場を一度通したものでなければならぬと思ふ。此の意味で本書は最も先驅者と見られえやう。

次に本書の内容は勿論「新譯佛教聖典」の註釋ではあるが、獨立の讀物としても興味あるものであらう。而して最も注意すべきは本書に附せられた五種の索引である。即ち(一)物語、(二)固有名詞、(三)福音、(四)典語・雜語・難句、(五)項目の五種である。此中、(一)(二)(四)は索引として普通のものであるが、(三)と(五)とは注目に價する。先づ(三)の福音は本書が「聖典」の註解書としての役目を果す上に最も必要なることである。(五)の項目は例へば因縁思想とか、中道論とか、佛性論、法性論、唯心論の如き、佛教の重要な項目二十二を出して、その一々に就て種々な問題の出所を示したものである。故に之は佛教の學的研究に従ふ者にも極めて有用である。我々は之によつて一つ一つの項目に就て大體の目安を附けることが出来る。甚だ便利である。此の索引あるが故に私は此處に本書を敢て薦めたいと思ふ次第である。著者は稀に見る篤學の士、幸ひに著者の眞の學的研究の成果の發表をひたすらに待つのみである。本書の刊行に際して一本を惠典されたる厚情を謝しつゝ、此處に本書を薦むる次第である。(四六判五三〇頁、昭和六年十一月、破塵閣書房發行)(龍山)

新刊紹介

朝鮮小史

小田省吾著

近時朝鮮史の研究は著しく進み新たに史料の世に出され、遺跡遺物の紹介されるものが多くなつて、史家の専門的な學的勞作の結晶は賑やかに讀者の前に現れた。しかし其等の多くは頗る浩瀚にして一般の閱讀に適するものではなくて、數千年に亘る半島の歴史を簡明にして且つ正確に論述されたものは皆無に等しいものであつた。本書はこの缺を補はんが爲めにものされたものにして著者は云ふ「一般に朝鮮に對する理解の爲に朝鮮史に關する著述を要求すること極めて急なものである。本書は實に最近に於ける學術的研究の成果に基いて朝鮮史の要領を簡単に説述し以て其の需要に應ぜんとするものである」と。内容目次左の如し。

上世

- | | |
|------------|---------------|
| 一、古朝鮮と四郡 | 二、三韓と三國 |
| 三、新羅の興起 | 四、百濟及び高句麗の滅亡 |
| 五、新羅一統時代 | 六、新羅の衰亡 |
| 中世 | |
| 一、高麗の創業と盛時 | 二、外戚の專權と武人の跋扈 |
| 三、高麗と蒙古 | 四、高麗の末路 |
| 近世 | |
| 一、朝鮮の創業 | 二、朝鮮の盛時 |

三、士禍と朋黨

四、壬辰丁酉の亂

五、丁卯、丙子の亂

六、黨爭の積弊

七、文運復興と世道政治

最近世

一、大院君の政治

二、日韓の併合

三、總督政治

通讀して感じたことは、著者自ら序文に書かれてあることではあるが、本書の説述の方法は全く王朝興亡の史實を尋ねて過去の事實の其のまゝを簡明に表現されてゐることであつて、朝鮮史に對して新しき史觀を立てられたものでもなく亦文化史的研究の賜でもない、だが菊版約百頁によくも正確に簡明にまとめられたことである。ことに圖版二十六葉、附録の歴代表、王室世系表、年代表、歴代疆域圖等は研究に益するところ甚大なるものあることを深く思ふ。(定價貳圓參拾錢、京城大阪屋號書店、六年十月發行)——(野上)

東方學報 第二冊

東方文化研究のための特別な機關である京都東方文化研究所の學的勞作の所産が即ち本書にして四六倍版約三百頁の美本である。收むるところの論説左の如し。

○顧愷之の山水畫論

伊勢專一郎氏

1、現存せる顧愷之の畫論、2、韓非子の畫論3、現實の映像としての繪畫、4、淮南子に於ける繪畫の生命、5、繪畫

の實在性、6、顧愷之の畫觀、7、畫雲台山記。

○戴宏解疑論考

吉川幸次郎氏

○支那古代の銅利器に就いて

梅原 未治氏

○説文解字段注攷正訂補

倉石武四郎氏

○玉壁考

水野 清一氏

1、序言 2、帶圖式穀壁 3、玻璃製穀壁 4、所謂秦式玉壁二種 5、穀粒文の源流とその推移 6、穀壁と蒲壁 7、素壁 8、玉壁の示す三つの様式 9、結言

○南嶽承遠傳とその淨土教 塚本善隆氏

1、序言 2、傳記資料 3、出家とその師唐禪師に就いて 4、智訥處寂の教學と當時の蜀地方の禪風 5、遊方と剃髮 6、玉泉寺蘭若和尚惠眞の教學 7、南嶽に於ける受戒修學 8、慈愍三藏慧日の教導 9、承遠の教化と南嶽彌陀寺 10 門下法昭と日悟 11、結語

○元史刑法志と元律との關係に就いて 安部 健夫氏

○爽簫館欣賞第一輯

伊勢專一郎氏

右の八論說何れもその方面に於いての雄篇であるけれども各篇の内容を紹介することは徒に長くなるからこゝにはたゞ支那佛教に關する塚本氏の前記論文のアウトラインを記して本書の紹介に代へたいと思ふ。

太宗高宗時代の善導と相並んで代宗德宗時代を代表する唐代淨土教史上の偉人である法照とその弟子とする承遠の傳は從來餘り知られてゐなかつた。従つてその教義も闡明でない。これ

は勿論承遠が一つの著述も傳へたことのないにもよるが亦善導程に日本の淨土教に與へた影響も少いからして學者がその方に餘り注意しなかつたことにもよることであらう。故に承遠傳の闡明が第一の目的であり、次に承遠の師侍受學せし人々の系統教義を明かにし、亦その門下の事蹟教義を知ることによりて承遠自身の淨土教義を類推せんとするのが第二の目的であると序言に見ゆる。而して第二節以下に於て南獄承遠の傳の研究に根本資料として、1、唐呂溫撰南獄大師遠公塔銘記、2、唐柳宗元撰南獄彌陀和尚碑、3、宋王古撰新修往生傳卷下、4、宋志磐撰佛祖統記卷二十七淨土立教志第一、5、清彰際清撰、淨土聖賢錄卷三の五つを擧げて攷證論及してある。研究の筆は承遠の師處寂からさらに遡りてその師智誥に走り、亦南獄佛教の骨體を尋ね、下つては承遠門下の英才である法然、日悟の二人の相を探究して凡そ次の如き結論を下されてある。

承遠は純禪と云ふよりも既に淨土教的色彩の加味せる蜀の禪門に於て佛道に入つた。剃髮の師惠眞は天台の人であり南獄は天台發祥の地であるからして承遠が天台教學を習ふことは疑ひない。南獄は持戒尊重の所であつたから承遠も持律嚴肅の人であつたらう。亦淨土教へ歸依の後も禪定を排しなかつたことは明である。等々と六ヶ條をあげて最後に著者は云ふ。「承遠の淨土教は要するに佛教は利他度生を眼目とすとの見地より淨門を時代の宗教なりとなし、而も禪戒等の諸善を廢捨せず諸行諸善を淨土往生の業に融會回向せるもの即ち支那淨土教の著しい

特色である禪戒淨の一致融合の教風の先驅をなすものである。」と。(昭和六年十一月發行價貳圓半)(野上)

René Grousset:
“Les Philosophies Indiennes.”
Les Systèmes, 2 vols.

1931 Paris.

新刊の「印度哲學——諸學派」は二卷より成り、ルネ・グレルセ氏の著述である。本書の内容を概觀して最も著しく吾人の心を捕へたものは、佛教に關する頁の極めて多量なることである。勿論之は從來の印度哲學史と稱さるゝものに比しての誤ではあるが、本書のもつ一特徴となされうらだらう。先づ全十一章の目次を示せば次の如くである。

- 第一章、ウパニシャット。
- 第二章、原始佛教(Le Bouddhisme ancien)
- 第三章、耆那教
- 第四章、勝論學派
- 第五章、正理學派
- 第六章、數論學派
- 第七章、バタンジャリの瑜伽派
- 第八章、小乘教諸派
- 第九章、中觀學派(Le Madhyamika)

以上第一卷

第十章、唯識學派(Des Vijnāna vadin)

第十一章、吠檀多學派。

以上第二卷。

佛敎は實に全十一章中の四章を占むる。然かも之を頁數に依つて見る時は更に増大し、二卷合して全七五八頁中、佛敎の占むる頁は三五〇頁程で、約五割足らずである。然らば如何にして佛敎の敘述がかくも多量と爲されるやうになつたのであらうか。

惟ふに之は今日印度哲學諸派の研究は大體上一階程を終り、特殊問題は別として、概説に於ては一つの型さへ生ずるやうになつた。グルッセ氏は此の型に墮することゝ嫌つたに違ひない。そして新鮮な内容を盛ることを努力したに違ひない。此の結果

勢ひ最近の新資料——漢譯より歐洲語譯されしものは彼等には新資料である——を蒐集することに努め自然佛敎の論部の方面が多量に取入れられることゝなつた。めである。グルッセ氏が長々しい頁にわたつて新資料・新智識として説述するものを見ると、日本の研究者からは實に微笑せざるをえないものが多い例へば「阿毘達磨俱舍論」には五十頁を費し、「中觀論」には六十頁を充て、龍樹の「大乘二十頌」、「廻諍論」、提婆の「四百論」、月稱の「入中論」、寂天の「入菩提行論」を出し、又唯識派では無着の「大乘莊嚴經論」に五十頁程を費し、世親の「唯識二十頌」、陳那の「觀所緣々論」を出したる後、玄奘の「成唯識論」の紹介にも五十頁を充て、ある。以上の如き冗漫な敘述方法を取れるために頁數を増したる如くも考へらるゝが、強ち之は佛敎のみにに限つてゐない。吠檀多派の如きはシャンカラとラーマヌジャの註釋によつて吠檀多經全體の解説を試み、之は實に二百頁近くに達してゐる。

とにかく内容の紹介の長短は時と場合によつていづれを可いづれを否とも爲しがたいが、以上に見る如く中觀派・唯識派の作品として出す作品は、餘りにもありあはせである。即ちその意味は、月稱の「入中論」を除いて、いづれも歐洲語譯の存するものゝみを用ひてゐる事實である。いづれもブツサン氏・山口益氏等の譯本の存するものゝみである。此の事實は否定したい。そしてその結果中觀派でも唯識派でも他の重要な作品を出すことを忘れてゐる。之は歐洲の佛敎研究のレベルを如實に示すものであり、此故に微笑を禁じえないのである。——しかし彼等の基礎的な方法によつて得られた智識と、漢譯の言葉に慣れてゐるに過ぎない程度の多くの東洋の學者とな、比較し反省する必要は充分に存する。

佛敎以外の學派は吠檀多派を除いて極めて簡単に述べられてゐるにすぎない。ウパニシャットに就ては年代・教義を述べ者那敎に就ては教義の概觀をあげ、勝論・正理兩學派に於てはそれ、の經の内容を述べ、數論・瑜伽兩派に於てはそれ、自在の數論頌とパタンジャリの瑜伽經との内容を略述してゐるにすぎない。前ミーマンサー派は説かれてゐない。しかるに吠檀多派に於ては、あの長々しいシャンカラとラーマヌジャとの註釋によつて、全四篇の經の内容を説き、次にシャンカラの「不二論」に對するラーマヌジャの反駁を擧げてゐる。

大體以上の如き内容を本書は有するが、學派を主として述べた關係上それらの相互關係等は出てゐないが、一々の學派に就いての概念をうるのには便利である。先きに「J. Histoire de l'Extreme-Orient」(極東の歴史)の二大冊を初め、その他「Sur les Traces du Bouddha」(佛の足跡を進む)等の著を爲し、歴史的方面に於て學界に奇異したルネ・グルッセ氏は今又、此の著によりて哲學史の方面に於ても深き造詣を有することを示してゐる。(龍山)